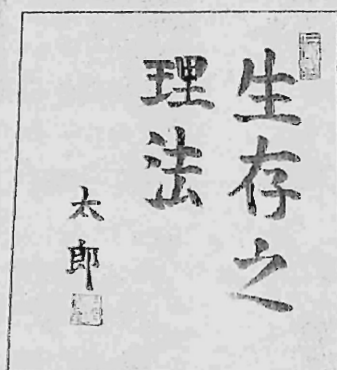


生存科学研究所 ニュース

Vol.1. No.1. 創刊号

1986.1.10発行



目 次

- ニュースの発行によせて 生存科学研究所理事長 茅 誠司 …… 1
- 会議「科学及び科学技術と人間」並びに研究プロジェクト …… 2
- ハーバード大学武見講座について …… 3
- 武見プログラム研究論文 目録 …… 6
- 生存科学研究会報告 …… 7
- エッセイズ・キュート …… 8
- 第2回武見国際シンポジウム予告 …… 9
- 維持会員だより …… 9
- ニュース オブ ニュース …… 10

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

ニュースの発行によせて

生存科学研究所理事長 茅 誠司

生存科学研究所の小平常務が来所され、当「ニュース」に原稿を書く様にと依頼を受けたのは昨年11月31日のことだった。あまり固苦しいものでなくとの事だったが、以来何を書こうかと頭の中にその件が残っていた。

次の週の金曜日、武見敬三君がやって来て「21世紀の健康政策」という、一昨年 of 第1回武見国際保健講座シンポジウムの会議録をくれた。この報告書を読みながら先の約束を果そうと考えていたのだが、その週末はバラの事で多忙を極めてしまった。この頃がバラの移植に最も良い時期で、茅ヶ崎の家に百本ほどあるバラのうち20本程を植え変えねばならない。30糎巾、深さ30糎の穴を掘り、肥料を入れ苗を植えるのは87才の私にはやはりきつい。鎌倉にいる次男に頼み（これには元手がかかっているが）手伝って貰った。

* * * *

そんな週末、家内が整理していた古い写真の中から、1935年に第2回日米科学協力委員会に出席して、ケネディ大統領を官邸に訪問した折の写真が出て来た。ケネディ大統領の弟がその前年に早稲田大学を訪問し、全学連につるし上げられた時の話が出て大笑いしている写真である。

ケネディ大統領は就任の最初に実に立派な演説をしたが、中にこんな言葉があった。

「もっとも強力な兵器を持っていれば戦争は起らない」と。ところが最近行われたレーガン大統領とゴルバチョフ書記長との会談では「決して相手をおさえ込む様な武力は持たない。核兵器による戦争が起れば勝ち負けはあ

り得ない。両方が滅亡するだけである」という意見が交されたという。

* * * *

「21世紀の健康政策」の中に、武見さんの「医療と平和」という一文がある。その中に「……ですから、核をやめろという議論が一方にあることは大変結構な事ですが、同時にそれらを無効なものにしてしまうという研究の方向が、人類の文化の基本になるものと考えたいと思うのであります」との考えが述べられている。

ところで昨年11月の日経「サイエンス」にこんな記事が載っていた。重い水素と三重水素を一億度くらいの高温で熱すると核融合が起り、ヘリウムになり、その際莫大なエネルギーが発生する。これが所謂水素爆弾である。この1億度という高い温度を作る為には、1920年8月6日広島を壊滅するのに用いられたウラン235を使わなければならない。

ウラン235は天然のウランには0.7%しか含まれていないので、これをフッ素と化合させフッ化ウランとし、気化したものを高熱中の多孔質隔膜を通過させる。これを何回も繰返して濃度を高くする。こうして20%以上に濃縮されたウラン235を1キログラム以上集めておけば、核分裂を起して自然爆発する。

そしてこの時発生した熱は水で冷やして川に流すのが、現在普通行われている方法で、その川の温度が高くなるのが測定されている。これは上空からリモートセンシングを用いて測定出来るのである。現在のところこの装置のあるところにしてはじめて水素爆弾を作る

ことが可能である。先に武見さんが述べられているのは、これらの装置を発見し、それを作らせない様にするという事ではないかと思う。

* * * *

更に武見さんの願いは、医療資源を国境を越えて配分し、より多くの人々の為に使うことで、それが平和への道に繋がると考えられている様である。

時代と共に地球上の人間の年齢構成が違って来ており、先進国では高齢者が多くなり(私もそのひとりだが)、彼等は活動力が減ってくるので生産力も当然落ちてくる。高齢社会の国が増えることは、彼等の生存を可能にする資源の生産を難しくする。それに加えて、人

間の生存を確保する為に出されるさまざまな要求に、どこまで応じたらよいのかというのも大きな問題である。

* * * *

私はこの本をまだ十分に読み切っておりません。これからも引き続き学ぶつもりですが、武見さんの考えを現実のものとする為には、多くの人々の力を得て、さまざまな問題を解決してゆかねばならないと思います。

願わくば日本国民の多くの方々が、武見プログラム(それは生存科学の国際的実践プログラムとも言えますが)とはどの様なものであるかに関心を持ち、その達成に協力されることを心から希望してやみません。

「科学および科学技術と人間」会議の開設について

科学および科学技術の進歩は、高度な社会文明を実現させた。21世紀を迎えようとしている今日、先進国のみならず発展途上国も、その社会、経済を維持発展させるためにこの上さらに新しい科学技術を求めて、この道を進もうとしている。特に先端科学技術の生命科学は、他の通信、情報処理科学技術と併せて、高度な社会生活水準と経済活動と結びつくものとして期待され、その発展に拍車をかけているのが現状である。

このことが示すように発展する科学および科学技術は、経済の発展とあいまって、自動的に加速化されるという事態が生じつつありその将来を、誰も予測することができないような時代にさしかかっている。ことに、遺伝子工学、臓器移植なども含みながら発展している生命科学は、その研究過程における実験

室内での成果の人間への適用は、時には、生命の尊厳にかかわるような問題にもつながることが考えられる。

この様な科学技術によってもたらされる問題は、人間の個人的な面に関わるものであると同時に、家、社会、国家との関わりの問題でもあり、広く人類の将来の問題とも関連している。この様な例をあげるまでもなく、これら科学技術の発展にともなう人間の問題は、深く考えなければならない現状にあるといえる。

* * * *

この様な時期に本研究所は、生存科学の理念を成り立たせている大きな枠組として、科学技術庁の後援を得て、「科学、および科学技術と人間」の問題をどのように考えればよいかという課題にとり組むこととなった。この

「会議」は、生物学、医学、物理学、哲学、宗教、法学、文学の各分野から12名の有識者に御参加を願い、組織されたもので、座長を岡本道雄先生にお願いし、「科学と人間の問題」を一般世上の議論よりももう少し深く突きつめることを考えている。すでに本会議は委員の一人である渡辺 慧先生に話題を提供していただき、その活動を開始したところである。

「科学および科学技術と人間」会議

座 長 岡本道雄

世話人代表 藤井 隆 井深 大

碧海純一 江橋節郎

大江精三 大谷藤郎

杉村 隆 玉城康四郎

三浦朱門 柳瀬睦男

渡辺 慧

このような会議の機構として、事務、また「科学と人間の問題」にのつての基礎的資料収集や調査研究を行う組織として、生存科学研究所員を中心とした5名からなるメンバーによ

つて研究班が組織され、活動をしている。

本研究プロジェクトは科学技術庁の後援を得るための事務的事情があつて現在その出発が遅れて、まだ成果をここに紹介するにいたっていないが、今後研究、および委員会の進展状況にあわせてその成果を徐々に公開する予定である。またこの研究プロジェクトは、故武見博士の念頭にあつた広い意味でのバイオエシックスの基礎的な分野を研究するもので、本研究所と関係のある方々との交流も図りたいと考えている。

研究課題名：

「ライフサイエンスを中心とした科学技術と人間および社会との調和を図る上での問題点の明確化に関する調査研究」

受託研究 研究員：

青木 清（代表者）、田村貞雄、武見敬三、
フォアン・マシア、村上陽一郎、
佐々木文子（事務局）

ハーバード大学武見講座について

1. 概要

武見講座については、今更紹介することもないように思われるか、ニュースの第1号であるので、簡単にその概要を記す。

武見講座は、正式名称を「ハーバード大学公衆衛生学大学院・国際保健武見プログラム」という。このプログラムは、故武見太郎博士とハーバード大学大学院学部長(当時)Howard H.Hiatt博士が、1975年及び1981年の世界医師会の会合において邂逅された際、国際保健の重要性について話合われ、その中から生れたものである。

この目的は4つあり、(1)日米両国において、医療資源を開発し運用するためのより効率的な方法を開発すること。(2)健康を阻害する国家間にまたがる原因を研究すること。(3)各国の保健政策とそのプログラムに関し、共同研究及び比較分析を行なうこと。(4)各国から共同研究及び教育のため、保健問題に関するすぐれた専門家や学者を招致することが掲げられている。

このような人の名を冠したプログラムを大学に設けることについては、日本ではそのような習慣がない。従つて「武見プログラム」

といつても、解りにくいかもしれないので一言助言したい。

アメリカの大学では、秀れた世界的な学者がいた時には、その名を記念して、様々な事業が行われる。最もよくあるのは、「——Lecture」というような名称で、基金を設け毎年1回その分野の秀れた研究者を招いて講演会を開くものである。又、「——賞」というのもよく作られる。このようなものであれば日本でも例があるが、米国では、更に「——professor」という名称で、1人の教授のポストを運用する場合もある。これが更に大規模になると「——プログラム」となり、単に1人の教授のみでなく、数名のスタッフやフェローをもつ日本でいう一種の「講座」の形態となる。武見プログラムは正にこのようなものであり、ハーバード大学が武見太郎博士を記念して基金を設け、これによってこのプログラムを運営している。

2. 武見プログラムの事業

武見プログラムの事業としては、これまで主に次の3つがあった。今後更に種々の事業が行われるかもしれないがこれは常に基本となる。

第1は、専任の研究者を任命して、国際保健に関する研究を行なうこと。第2は、全世界の若手の研究者に fellowship を与えて、国際保健の研究者の養成を図ること。第3は、国際保健の分野の研究集会（シンポジウム）を開催することである。

(1) 専任の研究者

1984年に武見プログラムが開設されて以来公衆衛生学部長ハイアット教授、その退任後はファインバーグ教授が、主任としてこのプ

ログラムの運営にあたってきたが、1985年に、専任教授の選考が行われ、Dr. Lincoln Chen が、初代の武見記念国際保健教授に任命された。チェン博士はハーバード大学出身の中国系米国人で、発展途上国の保健問題では国際的に著名な学者である。現在はニューデリーのフォード財団代表として、インド、ネパール等で活躍しているが、1986年度から、専任でハーバードに着任する。

なお日本側からも武見博士は客員教授であり、1985年には小泉明教授（東京大学）が客員教授として教鞭をとられた。

(2) 武見フェロー

1984年は5名、1985年は6名の武見フェローが全世界からハーバード大学に来て、研究したし、また研究しつつある。

その国籍はインド、インドネシア、韓国、中国、ベルギー、スーダン、イスラエル、スリランカ、コロンビア、日本と世界中に亘っている。日本からのフェローは、1984年が厚生省から田中慶司技官、1985年も同じ厚生省から藤井充技官であった。

(3) シンポジウム

第1回、武見シンポジウム（the 1st TAKEMI Symposium on International Health, Harvard university）は、1984年5月19、20日の両日、東京経団連の国際会議場で開催された。このシンポジウムのテーマは、「21世紀の国際保健問題——国境を越えた保健問題——」であり、日本側は大江精三教授、米国側はH.H.ハイアット教授の基調講演に続き、故武見太郎博士の「医療と平和」と題する講演がテープによって行われた。

この後21世紀に対応する保健政策が2つのセッションに分れて討議されたが、武見プロ

グラムの開設を記念するにふさわしい素晴らしいシンポジウムであった。

なおこの記録は、米国側でも出版されているが、日本語版は講談社から下記の題で出版された。

21世紀の健康政策

講談社刊 1800円

第2回目目のシンポジウムは、1986年ボストンにおいて開催される予定である。

3. 武見プログラムの運営

このプログラムの運営は、日本側の委員会とハーバード側の委員会によって、共同で運営されている。これらの委員会は、このプログラムの運営の基本的事項を定めると共に、運営に必要な基金の募集についても献身的な努力を続けてきた。

この歴史的なプログラムの今後の健全な発展のために、生存科学研究所も全面的に協力していくことになっている。

4. 武見プログラムの意義

ここで、蛇足ではあるが、武見プログラムのもつ意味について触れておきたい。このプログラムのことを聞いた方々の中には、なぜこのプログラムが米国にあるのか疑問に思われる方があるかもしれない。折角の武見プログラムなのであるから、日本の大学で日本人の手によって同じことをやってもよいのではないかという考え方があるのも理解できる。しかし、この武見プログラムの意義は、今後の保健問題には国境のようなものはないということ、武見博士が身をもって示された所に最も大きな意味があると思われる。今、全世界から、優秀な若手研究者がハーバードに

武見フェローとして集まり、相互に親しく研鑽をつみ、再び全世界に散っていく。彼等はそれぞれの国で世界の人々の健康のために努力することになる。その一人一人の心の中に武見博士が心に抱いた志が生き続けるとしたら、こんなに素晴らしいことはない。研鑽の場は、これらの人々が最も学び易い所であればよく、日本にこだわる必要は毛頭ない。

米国の有名なジョンスホプキンス大学医学部には「野口英世Lecture」というものがあり、年1回、講演会を開いている。ジョンスホプキンス大学に留学した経験のあるものは、皆このことを聞いて、日本人の名を冠したLectureのあることを嬉しく思った筈である。野口英世博士も常に世界の人々の健康を視点に活動した人であった。

日本も、今や日本国のみのかを考えている時代は終わったような気がする。そのことを我々に教えているこの武見プログラムの一層の発展のために、生存科学研究所維持会員の皆様にも是非御協力をいただきたい。

武見プログラム研究論文目録

武見プログラム研究論文

これまで、武見プログラムの中で下記の研究が行われた。これらの論文に興味のある方

は、生存科学研究所に連絡ください。(ご要望があれば、実費にてコピーをお送りいたします。)

* * * *

1. "REVIEW OF CDC ACTIVITIES AND INITIATIVES IN INTERNATIONAL HEALTH"
March 20, 1984
DONALD HOPKINS, M.D. MPH
DEPUTY DIRECTOR, CENTERS FOR DISEASE CONTROL
2. "THE ROLL OF MEDICAL TECHNOLOGY IN INTERNATIONAL HEALTH"
March 19, 1984
Dr. DAVID BANTA
DEPUTY DIRECTOR, PAN AMERICAN HEALTH ORGANIZATION
3. "EPIDEMIOLOGY AND THE WAR IN LIBERATION"
April 23, 1985
HAROUTUNE K.ARMENIAN, M.D. DPH
DEAN, FACULTY OF HEALTH SCIENCES AMERICAN UNIVERSITY OF BEIRUT
4. "THE 1980 AND 1984 V.S. ELECTIONS AND THE NEW DEAL:
AN ALTERNATIVE INTERPRETATION"
April 17, 1984
VICENTE NAVARRO, M.D., DMSA, DR. PH
PROFESSOR OF HEALTH POLICY SCHOOL OF HYGIENE AND PUBLIC
HEALTH
THE JONS HOPKINS UNIVERSITY
5. "HEALTH FOR ALL
ORIGINS AND MEANING, PROBLEMS AND PROSPECTS
A POLICY PERSPECTIVE"
February 28, 1984
Dr. JOHN BRYANT
SPECIAL ASSISTANT FOR INTERNATIONAL HEALTH POLICY FORGARTY
INTERNATIONAL CENTER.
NATIONAL INSTITUTES OF HEALTH

6. "INTERACTIONS OF HEALTH TECHNOLOGY & SOCIAL ORGANIZATION"

March 26. 1984

Dr. LINCOLN CHEN

REPRESENTATIVE, FORD FOUNDATION IN INDIA

7. "EVEN WOMAN HAVE TO EAT:

NUTRITIONAL PROBLEMS OF THIRD WORLD WOMEN"

November 20. 1984

T. SCARLETT EPSTEIN

DIRECTOR OF ACTION-RESEARCH ON POPULATION, RURAL

DEVELOPMENT AND WOMEN WITH SPECIFIC THIRD WORLD FOCUS

生存科学研究会報告

現在までの議題は別表のように、人口問題から微量元素に至るまで、多様多面に亘る。その中から、まさに今日的課題である第12回「医療制度と医療政策」を取り上げてみよう。

(医療法改正案が修正成立する見込濃厚。衆院社労委では地域医療計画について「診療側の意見を聞かなければならない」を「聞くものとする」に改めるべきだ、という発言もある。政治家の制度いじりである。背景には医療費削減の政策がある。当研究会の見識は次のようなものである)

* * * *

A会員：政策には目的関数と価値判断が必要だが、日本の経済政策は目的関数設定をはずして政策を立ててきた。そのため成功のあとに混乱があった。それは効率性と成長性を標的にしたもので、その流れが企業を中心とした経済政策の中に医療政策を包含していくであろうという危険を感じさせる。

* * * *

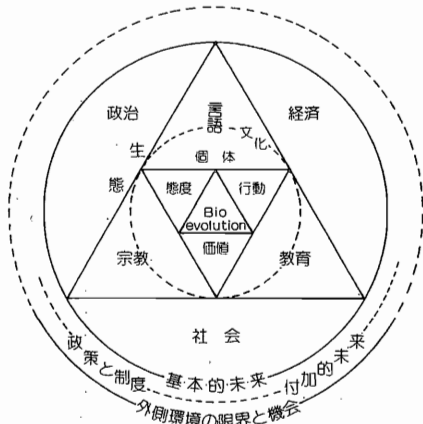
B会員：価値の選択に関する社会の力のぶつかり合いで、力の均衡ができたところで政策が固まり制度化する。制度とは言語的技術を使った規則づくりであるから、時間が経つと空洞化する危険がある。それを防ぐには政

第1回	S.57.4月	設立趣旨説明
2	6月	将来人口の推計
3	7月	経済学の歴史的流れ
4	8月	医療福祉、世界的人口問題
5	9月	日本の老人問題
6	10月	医療経済の将来展望
7	12月	生存の理法
8	S.58.2月	近未来の医療
9	3月	福祉の経済学
10	5月	現在の医療福祉の問題
11	6月	生存福祉と産業医学
12	7月	医療制度と医療政策
13	10月	ハーバード大学武見講座の帰朝報告、人体の特殊性と健保制度の改革
14	11月	世界の人口問題と日本人口の動向、日本保健衛生動向
15	12月	医療制度と医療政策(II)
16	S.59.2月	生存科学とBioethics
17	3月	システムと生存科学、生体システムと環境システム
18	4月	武見太郎先生と微量元素
19	7月	第1回武見シンポジウムの成果と生存科学研究の緊要性
20	9月	生存科学の目ざすもの
21	10月	制約されたもとの医療資源の配分
22	12月	医薬品産業の長期展望報告
23	S.60.2月	健康政策研究報告
24	6月	生存科学研究会のあり方

策レベルの活力が常に注入される必要がある。

* * * *

人間生存の体系 C会員の概念図



武見座長：それでは私から意見を述べます。「医療制度と医療政策はいつも並べて考えなければならない。日本の行政はretrospectiveでprospectiveではない。したがって目的設定と制度に時間的ずれがあり、ために大きなむだを生む。目的設定の遅れは崩壊

につながる。これを防ぐにはコミュニティ・レベルで、地域のしっかりした目的設定が必要である。20年後の地域の変化を想定しながら、健康をタイナミックに捉えていくべきである。

* * * *

B会員：日本の場合は政策が表に出てこないで、制度が上位にくる。制度を動かす力は顕著だけれども、無責任となってしまふ。これを変革するためには、政策を表面に引っ張り出す必要がある。そこで価値選択の議論をすべきだ。とくに生命の操作ができるようになった現代の新しい制度づくりが必要だけれども、それにはどうしてもまず政策論争がなければならない。その政策論争にはコミュニティ・レベルでの医師の活動が非常に重要だ。

* * * *

そして「モノではなく人間としてみる経済が、J.Salk and J.Salkの図をモティフアイしたC会員の概念図にあてはまるであろう。

エッセイズ・キュート

「今アメリカでは、創造力コンサルタントが花ざかり」とアメリカの経済雑誌『ビジネス・ウィーク』の最近号が創造力について特集している。

1970年代までの研究では、創造力は人間の脳の右側の所産であり、一方論理的な思考は脳の左側の所産とされてきた。しかし80年代に入ってからの研究では、人間の脳の機能は「二分法」で説明できるような単純なものではなく、もっと遥かに複雑なものであることが分かった。ある学者は「創造力とは人間の持っている様々の思考を使いこなす能力である」と定義しているが、要するに人間の創造

力は持って生まれた能力ではなく、訓練によってどんどん伸びる性質のものであるという。

これをうけて、アメリカでは、創造力をより豊かにするコンサルタントが次々と誕生し、これが現在80社にもなった。なかには研修生の創造力を伸ばすために140もの違った技術を開発し、相手の能力に応じて使いわけているのも出てきた。

一方、企業側も新製品開発のために、これら創造力コンサルタントを招いて社員教育を行うところが増えており、すでにその成果をあげているものもある。これを裏づけるように、一流のコンサルタントともなると、1日

のコンサルタント料が1万ドル(200万円)にもなるというから驚きだ。

もつとも、記事は「安易に創造力を豊かにするような方法はなく、偉大な画家、作曲家

といわれる人の多くは傑作といわれる作品を生み出す前に10年間の刻苦勉勵の時代をもっている」とも強調している。

(〇)

第2回武見国際シンポジウム予告

ハーバード大学武見国際保健学講座の国際シンポジウムは日米交互に隔年開催されることになっており、1984年5月日本で行われた第1回に引続いて、第2回がハーバード大学側の主催で米国ボストンで行われる。そのスケジュールが右記のごとく決定された。参加ご希望の方は研究所迄連絡ください。

日時：1986年5月20・21・22日

場所：米国 ボストン

主題：Health, Nutrition
and Economic Adjustment

維持会員だより

バイオエシックス研究への期待

昭和56年9月16日、盛岡市で開かれた東北医連総会並びに学術大会は、武見先生が特別講演「医療の変遷とそれへの対応」を通じ、生存科学研究の重要性を述べられた最後の機会となった。

当日、医政科学学会のシンポジウムは「バイオエシックスと地域医療」をテーマに選んだが正直のところ演者も聴衆もその難解さに戸迷いを隠せなかった。

それでも討論の総括を快く引き受けられた武見先生はEncyclopedia of Bioethicsの分担執筆者の立場から未完成な学問(バイオエシックス)について解説され、「上からのお下げ渡してなく地方でこのような自由な発言をされることは大切である。東北も未開地区ではない、堂々と論議してほしい。期待できるリーダー達の育っている姿を見て満足であ

る」とも述べられ、会員を励まされた。

翌朝、先生を囲む朝食会で同席していた岩動参議院議員(後の科学技術庁長官)と、武見プログラムの実現について満足げに話されていたのが印象的であった。

シンポジストであった筆者もバイオエシックスに関する参考文献の入手に苦労したが、幸い、当日の司会役・県医師会役員(生存科学研究所評議員)のご協力により文献が得られ何とか責を果し得た経緯がある。医療に関わる末端会員のわれわれにとっても、この研究は避けて通れぬ課題であり、今後、研究所の研究成果を期待するとともに、地方会員の学習資料の提供についても特段のご高配を賜わるよう、研究所の発展を祈念しつつお願い申し上げる次第である。

(会員・岩手県 桜井末男)

ニュース・オブ・ニュース

ファインバーグ学部長、チェン武見記念教授 来日

ハーバード大学公衆衛生大学院H.V.ファインバーグ学部長と同大学武見講座のL・チェン武見記念教授を迎えて、生存科学研究所は12月6日夜港区六本木の国際文化会館において特別記念講演会を開催した。研究所の維持会員を含め多くの関係者が出席、国際保健に関する活発な討議がなされた。

総合司会は土屋健三郎氏（産業医科大学学長）。ファインバーグ教授はEvaluation of New Medical Technology（新しい医療技術の評価）と題して、チェン教授はHunger and Malnutrition; Prospect and Challenges（飢餓と栄養失調；展望と挑戦）と題してそれぞれ講演。それぞれのコメンテーターは簗野脩一氏（国立公衆衛生院疫学学部長）、小泉明氏（東京大学医学部教授）であった。（詳細は後報）

* * * *

生存科学研究所・研究基金合同顧問会議

12月5日午後、財団法人生存科学研究所顧問と公益信託生存科学研究基金顧問の合同会議が、財団の茅理事長、基金の武見英子名誉運営委員長、小平運営委員長等の出席のもとで開催された。来日しているハーバード大学公衆衛生大学院ファインバーグ学部長、チェン武見記念教授、ライシュ武見講座事務局長も同席し、研究所、基金、武見講座の将来の発展と協力の緊密化について話し合わせ、その基礎が確立された。

武見太郎先生の文献集作成作業開始さる

生存科学研究基金による武見太郎先生の文献収集・整理の作業が開始された。既に11月19日に準備のための運営委員会が持たれ、文献目録作成の基準案等が検討され始めた。

単なる文献集にとどまらず、時代の背景や先生の蔵書等による思想的基盤までも揃えた多面的資料編纂が、その道の専門家の協力のもとに進められる。また同時に武見先生のご思想・哲学をめぐって、多くの方々による記念論文集作成の計画も進行されている。

* * * *

ハイテクと生存科学

—研究会の1986年研究テーマ— 決る

第25回生存科学研究会（10月26日開催）において、研究会の内規が決り、年間の研究計画を立てて研究会を行うことになった。

1986年は「ハイテクノロジーと生存科学」というテーマで、各方面の専門の方からその基礎理論と限界領域を明示して戴き、そこにおけるDiscipline crisis（規律の危機）、Context crisis（文脈の危機）としての問題点を、生存科学との関係において全員で検討しようという計画である。

第1回は1月18日に行われる予定である。

なお、1年間の研究の後、年1回は全研究過程を総合的に検討する研究会総会をもち、研究所維持会員等へもオープン化しようと準備されている。

* * * *

生存科学研究所主催の講演会準備中

生存科学の研究推進と普及を目的として、

研究所推持会員や一般住民への公開講演会の開催が準備中である。

主題は「現代科学の社会における生命観(仮題)」で、宗教の立場はじめ色々な立場からこの問題にアプローチする予定である。

* * * *

生存科学研究所の英語名正式に決定

研究所の正式英語名が“The Institute of Seizon and Life Sciences”と決定された。従来 Sciences for Human Survival を仮に用いていたが、これでは武見先生の言われる「生存」の意味を十分に表わさないとして改訂が考えられていた。今回ハーバード大学側のアドバイスもあり上記の如く決まった。Life Science は生存科学の中に含まれるものではあるが、Seizon だけでは初めて聞く外国の人には理解されにくいので Life Science も加えた名称とした。これは又、武見先生の言われる「生存」のもつ意味の広さが、ハーバード大学側に良く理解されたことを物語るものでもある。

編集後記

間もなく誕生満2年を迎える生存科学研究所は、運営体制・研究体制ともども軌道に乗ってきました。ニュースを発行出来るようになったことはそれを物語っていると言えますよう。

生存科学という、武見先生が残して下さった大きな遺産を、少しでも多くの方々に身近に感じ取って戴けるよう、編集関係者一同努力をしてみたい。

維持会員の方々からもご意見やお便りをいただいで掲載していきたいと考えておりますのでご投稿ください。

生存科学研究所ニュース

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電話 03-563-3518